

## 巻頭言

## Shinzo come back



| 会長 山崎 學

安倍晋三前総理は7年8ヵ月という歴代総理連続在任期間記録を更新した直後の令和2年8月28日、持病の潰瘍性大腸炎の再発を理由に記者会見で退任の意向を表明した。マスコミは退任表明の前から慶応大学病院受診を詮索して多くの時間を割いて報道し、闘病中の総理にストレスをかけ続けた。専門家の説明では潰瘍性大腸炎の急性増悪期には、頻回の腹痛、下痢に悩まされて睡眠障害になり、このことがさらに病状を悪化させる誘因になるといったネガティブサイクルに陥るといふ。安倍前総理も同じ病状で苦しみ、かなり応えたような気がする。

潰瘍性大腸炎という難病と闘いながら執務している総理の病状について日頃から弱者の人権、プライバシーの保護を高らかに謳って弱者の味方を装っているマスコミはチンドン屋のようになって鉦や太鼓ではやしたてた。辞意表明の記者会見でも報道各社を代表した質問者の陳腐な質問にはあきれ果てた。歴史を塗り替えた総理に対して、まず敬意を表して質問に入るべきであるのに「総理、お疲れさまでした」とねぎらった記者は会見終盤で質問した中国新聞社の下久保記者のみとは恐れいった。まさに今回の会見は報道各社記者クラブの質の悪さが全国に配信された瞬間でもあった。

自国の総理は思い切り批判するのに、チベット・ウイグルで思想弾圧、人権侵害・民族浄化を行っている習近平、神経剤の「ノビチョク」や放射線物質の「ポロニウム」を使って反体制派を抑え込んでいるウラジーミル・プーチン、ロヒンギャに対する人権侵害で国際的に批判されているアウン・サン・スー・チー等の批判記事を目にすることは少ない。一方では日米同盟で守られ、報道の自由を謳歌しているのにドナルド・トランプの悪口は書き放題である。恣意的な記事の中で「国民の多くは」「国民目線で見ると」といった無責任な自己弁護の表現が溢れている現状を憂いている。客観的事実の報道ではない記事は自分の主張として自分の責任で書くのが王道である。

悪夢のような民主党政権時代から「アベノミクス」で奇跡的な経済発展をしたところだが、中国産コロナウイルスが原因で世界的な経済不況の波が押し寄せてくる可能性が強い。このことで我が国は、小泉内閣からの流れである規制改革を進めて貧富の差を拡大させる新自由主義を続けるのか、プライバシーを担保しながら緩やかな国家統制を強める社会形態にするのか、大きな岐

路に立たされている気がしている。

政権運営に当たって安倍晋三前総理は、3年半にわたる無為無策の民主党政権に変わって、GDP、株価、失業率を大幅に改善し、外交面でもG7、G20でセンターに立ちつづけた。退任に当たって諸外国からは称賛の声が寄せられ、国民は今更ながら安倍ロスを体験することになった。天敵の朝日新聞が9月2、3日に行った世論調査でも第2次安倍政権の実績を「大いに評価する」17%、「ある程度評価する」54%と71%の国民が評価している。今になってみるとあのジャーナリズムの安倍叩きは一体何だったのかと思う。

菅義偉新総理は今まで官僚の反対で頓挫していた少子化対策としての不妊治療の保険適応、携帯電話料金の大幅な引き下げという身近な問題から存在感を出そうと腐心している。コロナ禍で国民が苦しんでいるのに野党は相変わらず森友・加計・桜の3点セットで騒いでいる。馬鹿につける薬はないとはよく言ったものである。

幸いにして安倍前総理は新薬の点滴療法が奏功して健康状態が劇的に改善していると聞いている。安倍晋三前総理の良さは義理と人情に生きていることだと思っている。一方でこの人間性の良さは安倍晋三前総理の弱点にもなっている。まさに長所と短所は表裏一体である。郷土の先輩である桂太郎も3回総理大臣を経験している。再び日本国が安倍晋三を必要とする時が必ず来ると信じている。

二度あることは三度ある。